

バンコク日本人学校における社会科副読本の改訂について

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校） 教諭
群馬県高崎市立塚沢中学校 教諭 関 口 南

キーワード：在外教育施設、バンコク、小学校社会科、社会科副読本改訂作業

1. はじめに

全校児童生徒、合わせて3000人を越えたこともある世界一の大規模校で3年間教壇に立つ機会に恵まれた（小学部2年間、中学部1年間）。在外教育施設に派遣されることも初めてだが、大規模校での勤務の経験も無かったので、貴重な経験ができた3年間であった。派遣期間の中で私が主に携わった、小学校社会科副読本の改訂作業についての概略を説明する。

2. バンコク日本人学校での社会科教育と副読本

(1) バンコク日本人学校での社会科教育の困難さ

社会科の学習は小学校3年生から始まるが、多くは自分たちの身近な地域についての学習から始まる。そこで、各市町村の教育委員会が中心となり副教材を作成し、自分たちが生活している身近な地域についての学習を進めている。よって、外国でこの分野の学習をする際には教員のより深い地域の理解と教材研究が必要となる。

外国で社会科を学習する上で感じる困難さをまとめると以下の2点になる。①主に教員に関することと、②主に子どもに関することに分けられる。

①教員自身が、日本に住んでいれば当たり前に分かる社会の仕組みが分からない。

自分の捨てたごみがどこで処理されるのか、救急車や消防車の呼び方、学校の回りにある施設の名前、公共施設を教えることが外国においては難しい。どのように調べればよいのか分からないことも多い。

②居住年数から、子どもの方が地域のことに詳しいことも多い。また、子どもの経験値がまちまちであり、身の回りの地域という概念が少ない。

子どもによってはルーツがタイにある、またはタイで両親が起業している等の理由で生まれてからずっとタイに住んでいる子も多い。来タイ直後の子どもと日本に住んだことの無い子ども達が同じ教室で同じ授業を受ける。また、子ども達はバス通学であり、自分の足で歩いて学校に来ることがないので、学校周辺の町並みに土地勘が無く、自分の身近な地域であるという感覚が薄い。

このような困難さを抱えながら、バンコク校でも年間指導計画を立て、子ども達がいつ日本に戻っても困ることがないように、身近な地域の学習の際には全国版の教科書とバンコク版の副読本を並行して学習している。

(2) 副読本の実態

小学校3年生、4年生の社会科の学習に必要な副読本が持っていた課題を挙げると次のようになる。

①現在の社会科教科書と内容が合っていない。

現在東京書籍版の教科書を使い授業を行っている。評価テストも東京書籍版を使用しているため、内容を削れない。そのため授業時間を増やさなければならない状況にある。また、そのままだと授業で使えない。使い方が分からない資料も多かったため、資料の精選が必要であった。さらに、社会科だけでなく、総合的な学習の時間での調べ学習に、子ども達が使える内容にする必要があった。

②昔の資料をそのまま使っている。現在のバンコク都との違いが生じている。

地図や写真の更新がしばらく行われていなかったためと考えられる。

よって、現在の教科書（東京書籍版）と併せて学習できるような内容を掲載すること、そして最新の資料を集め情報を更新する必要性があった。また教材（プリントや白地図）も併せて開発し、授業ですぐに使えること

が必要と考えた。

3. 副読本「みんなのまち タイ・バンコク」改訂作業について

(1) 改訂の日程と組織

約1年という短い期間での改訂作業となった。平成29年度の4月に改訂作業を始め、翌30年の6月には出版にこぎ着けた。月に1回の編集委員会だけでは足りないので、夏期休業中には実地踏査などで博物館や公共施設に集中的に学習、取材に行き、公的機関にインタビューを行った。本来は30年度の4月に使用開始の予定であったが間に合わなかった。

編集委員会には小学校各学年の社会科担当と、中学部の社会科主任、そして、3、4学年の主任や小学部の教頭が参加した。表紙やイラストなども校内の絵が得意な教員に協力を依頼した。本文の執筆は主に子ども達が使う小学校3、4年生の社会科担当に依頼した。私は縁あって小学部の社会科主任をしていたので編集長となり、毎回の会議のセッティング、全体のレイアウト案、原稿の割り振り・執筆を主に担当した。

(2) 改訂のポイント

改訂のポイントとしたのは以下の3点である。

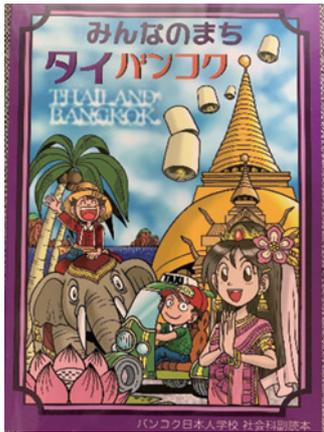
- ①資料の更新、充実。調べ学習にも対応できる情報量。
- ②子ども達の身近な地域に特化。
- ③眺めていて楽しい色使い、読んで学べるタイの文化。

①に関しては近年の改訂ではあまり行われていなかった写真や地図の改訂を行った。とくに、写真に関しては自分たちで学校の周りを巡ったり、タイの祭りに赴いたりして資料を集めた。分担をした結果、かなりの枚数を確保することができた。また、小学校3年生の社会科見学でお世話になる企業には監修をしていただき、最新の資料と写真を提供していただくこともできた。意外と苦労したのが地図だった。タイで日本の国土地理院の出版しているような地図を手に入れるのは難しく、結局はGoogleマップをそのまま使うことになってしまった。地図記号はそもそも世界共通ではないので、タイの地図が手に入ってもなかなか使い方と使い所が難しかった。また、小学校では総合的な学習の時間にタイについての調べ学習を行っている。小学校の調べ学習にも使えるような資料集としての用途でも使えるように「祭り」「芸能」などの分野についてのページを多くした。

②に関しては、子ども達にとって身近な地域がない中、小学校3年生に関しては「学校のまわり」や「市の様子」の学習をさせなくてはならない。ちなみにバンコクは都であり、バンコク都には50の区がある。バンコク日本人学校はバーンカピ区にあり、子ども達の居住区はワッタナー区やクロントゥーイ区などにある。住んでいる区と学校のある区が違うので、学校の周りの学習をしても子ども達に伝わりにくいのも当然である（子どもたちのほとんどはバス通学であり、住んでいるマンションからバスが出る）。よって「学校のまわり」の学習では、学校の外に自由に出入りできない状況で学校の周りを学習させるために学習ビデオと教材を作り、少しでも学習がしやすくなるように工夫をした。

「市の様子」の部分では、以前の副読本では使わないページが多かったので、子どもたちの多く住むワッタナー区の記事を多くして大幅に改訂した。子どもたちが特に多く住んでいる駅の周辺の情報を衛星写真と地形図で照らし合わせられるように編集し、写真も全て撮り直した。

③は今回の改訂で初めて試みた。タイに来て、初めて資料集を手にとった子ども達にタイ・バンコクがどのような所なのかを目で見て楽しんで貰えるような巻頭資料ページを設けた。タイの習慣やタイの子ども達の遊び、料理や果物、乗り物、伝統的な服装など、子ども達が興味を持つであろうことをトピックにして写真や表、イラストを使って分かりやすくまとめた。授業で使うだけでなく、休み時間に眺めているだけで何となくタイという国の文化が分かるように、そして家族の仕事の都合で日本に帰った際に、タイという国を日本の友達に説明するのに役立つような資料集にした。



副読本「みんなのまち タイ・バンコク」表紙



巻頭の資料ページ

4. 反省

(1) 日程に関して

今回のような大規模な改訂をするには1年では足りないというのが正直な感想である。特に内容の精査、関係機関にしっかりとチェックをお願いするには時間がかかる。協力をお願いする側として時間に余裕を持つことが必要と感じた。また、十分な実地踏査をするには、時間も掛かる。通常の学校業務の他にするには限界があると感じた。改訂は十分な時間を取って計画的に行うことが必要である。

また、教員の入れ替わりが激しいのも在外教育施設ならではのことである。これからも4年に1度しっかりと改訂を行い、内容を更新していくためにも、今回の改訂作業の詳細を記録として残しておくことが必要と考えた。

(2) 言語の壁

今回の改訂にはバンコク日本人学校のタイ語の先生方に非常にお世話になった。小学校4年生の学習分野である消防署やゴミ処理場、浄水場に伺う際には、バンコク校のディレクターにアポイントメントをとっていただき、タイ語の先生方と一緒に見学をした。専門用語や細かいニュアンスのタイ語も日本語に訳していただくことで、やっと内容の執筆まで辿り付くことができた。日本人の教員だけでは到底無理なことだったが、快く取材や翻訳を引き受けてくださったタイの先生方には感謝してもし切れない。

(3) 成果

内容の精選と写真の撮り直しを行った結果、多くの先生方から、授業がしやすくなったとの反応をいただいた。評価テストも副読本で使った素材を使って作成することができている。着々と社会科の学習環境が整備されていることを実感している。また、多くの先生方がこの編集作業を通して自分たちの暮らしている社会に興味をもつきっかけができたと振り返っていた。お世話になった企業の方からも、「タイのことが分かって勉強になる」と好評をいただくことができた。

5. おわりに

社会科を学習する上で大切なことは身近な地域の存在なのだというのをこの3年間で強く感じた。小学部で教鞭を執った際には身近な地域としてバンコクを学ばせる経験ができたし、中学部では、自分の育った場所とバンコクとを比較させながら日本の諸地域を学ばせるという経験ができた。バンコクで学んだ小学生たちが日本に帰り、バンコクとの違いを比較しながら自分の地域のことを学んでくれることが楽しみである。日本に住んだ経験がない子どもでもしっかりとバンコクが「身近な地域」＝「ふるさと」だと思えるような学びができるように、小学校社会科でのバンコクの勉強が充実したものでなければいけないと強く感じた。私が編纂に携わった副読本を日本にお土産として持って帰り、私はバンコクも「ふるさと」なんだと感じてくれる子どもたちが多くなってくれれば本望である。